
俺とあいつ

神龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とあいつ

【Nコード】

N2460B

【作者名】

神龍

【あらすじ】

毎日を退屈と思っている青年。ある日：研究所から実験体が逃げたということを知る。そして、その実験体により青年は退屈な日々から抜け出すが…。

第一話

退屈な日々だった：

もうそう思って何年がたつだろうか：

少なからず1、2年間ではないだろう。

俺は日々の生活に刺激が欲しいとは思わなかった。だけど、日々の生活に退屈さを覚えていた…。

一応学校には行ってるが：真剣に授業を受けるわけでもなく…だからと言って不良生徒というわけでもない。

友人関係は皆無で、作ろうとは思わない。

そんなある日：

何か妙に目覚めが良く、二度寝することさえも許されないぐらい頭がスッキリしていた。

…仕方ない、起きよう。

台所にむかい朝食の準備を始めた。

この家に俺以外は誰もいない。

まあ：一人暮らしだから当たり前なんだが…。

「……。」

朝食をとりつつ新聞を読んでいると、ちょっと目についた見出しがあった。

『研究所から実験体逃亡』

実験体か…。

何故かその見出しに興味がわき時間もあつたので軽く内容に目を通した。

「昨日、23時04分。龍宮研究所より二匹の実験体が逃亡した。逃亡した実験体の内一匹は、川に逃げ込み消息を完全に絶った。もう一匹は市街地に逃げ込み今だ発見されず。警察も本格的に搜索を開始するもよう。」

龍宮研究所…？

聞き覚えがない場所だな。それに住所らしきことも書かれてない。世間に知られたくないのか…？

それにしても実験体か…

二匹って事は獣なんだろうな。

今さらキメラを作ってどうするんだか…。

そんな事を考えていたらちようど家を出る時間だった。

「行ってきます」

誰もいない家に俺の声が響きわたった……。

くつづく

第二話

学校についたら何人かの生徒が何やら話していた。

どうせ暇だったのでその話しに耳を傾けた。

「今日のニュースみたか？」

「実験体やつ？」

「そうそう」

「噂だったらその研究所はこの近くにあるらしいぜ。」

「マジで!？」

「マジで」

「本気と書いてマジと読む」

「関係ないだろ…それは…。」

「「…。」」

「ま、まあ…とにかく実験体は近くにいるんだよ」

そこまで聞くとチャイムが鳴った。……実験体は近くにいるのか

そう思っただけで妙に退屈な気分はなくなり久しぶりに授業を真面目に受けた。

本当に久しぶりに時間の流れが早いと思った。

時は放課後…

部活に入ってるものは部活に行き、そうでないものは友達と話したり図書室に行ったりするが、俺はそんな事をせずに足早に学校を出た。

帰ったらニュースを見よう。

もちろん実験体についてのニュースがないかを確認するためだ。何故ここまで実験体に執着するかはわからなかった。けれど…こんなに何かに執着したのは久しぶりだ。軽い足取りで帰り道を歩いていたが…

しかし…フと足が止まった

“ 実験体を見つけてどうする…?”

さっきまで込み上げてきていた気持ちは一気に流されていった…。また何時もの気持ちに戻りいつもの足取りで…いや足取りはいつもより重いかもしれない。

また退屈な気持ちを抱き家へと帰っていった…。

また時間の流れが元に戻った…。

くつづく

第三話

重い足取りのまま、自分の家がある小さなアパートの前まできた。けして豪華というわけではない。

しかし、住めば都という言葉があるように住み心地はけして悪くない。

近所付き合いは苦手だからどんな人が住んでるかは全員把握してないが、知ってる限りいい人たちばかりだ…。

そんなこんなで自分の家の扉を開け

「ただいま」

と行きと同じく誰もいない部屋で声を響かせた。

「……ん。」

部屋に行くところとした変化に気づいた。

家を出た時には閉まっていたはずの窓が開いていて、引きっぱなしで放置してある布団が妙に盛り上がっている。

「……。」

気を引き締めやや警戒しつつも布団を捲った。

「……。」

布団を捲ってでてきたものを見て言葉を失う。

布団の中から出てきたのは、幼き寝顔を浮かべながらも銀髪の綺麗な髪を散らばらせながらも体を丸めて眠る子供だった。

しかも、服装はノースリーブス（しかもヘソだし）で短パンという。正に子供は風の子という象徴的服装だった。

手からヒジまでにかけて妙に大きくふっくらした手袋みたいなのをつけてるから寒くはないのだろう…。

しかし、見てる側は妙に寒さを感じる。

「……。」

見てるこちらが寒いので布団をかけなおしてやる。

その時、手が髪に触れ、髪が濡れてる事に気づいた。

「……。」

妙な服装…見覚えのない顔…髪が濡れてる。

様々な要素の中、導きだした結果は…。

「この子供が…実験体？」

子供はまだ穏やかな寝息をたてていた…。

〜
つ
つ
く
〜

第四話

この子供が…実験体…。

そんな自分の言葉にハツとする。こんな子供が実験体なわけがない…。

まず新聞では逃げ出した実験体を匹と、獣の数えかたをしていた。それなのに…こんな子供が実験体なはずがない。

自分が一瞬浮かべた考えを捨てるため一度頭を振るい、もう一度子供を見た。

相変わらず穏やかな寝息をたてて無防備に子供は寝ている。

：俺もこんな寝顔で寝てるのだろうか。

そんなしょうもない考えを捨てるため頭を振るう。

しかし、その時…またさっき一瞬浮かべた考えがまた浮かんできた。

実験体…。

もうそう思ったらそうとしか思えなかった…。

この子供は実験体の一匹。多分、川に逃げ込んだ方の…。

とりあえず起こして話を聞こう。

言葉が通じるかわからないが…。

「おい、起きろ。」

軽く体を揺さぶる。

自分の手に触れている感触は多分、人と何ら変わらない。

本当に実験体…？

その前になんの実験体？

よくよく考えたらそんなことも知らずに実験体と決めつけていた。

……が起こすのは止めなかった。

「んゝ」

起きる気配はない…。

「起きろ。」

さつきよりも強く体を揺さぶる。

「んゝん」

やっと微かに目を開けた。

「んゝ」

「わぁ！」

寝惚けてるのか、子供は急に抱きついてきた。

「離れろ。」

「んゝ」

「……。」

「…うにゃ？」

「……起きたか。」

「……だれ？」

「……。」

どうやら退屈な日々に終止符がうたれたみたいだ…。

くつづく

第五話

「……だれ？」

だれ…といきなり問われた。

…素直に名のるべきか、こちらの質問をぶつけるべきか。
そんな事を考えながら、子供をみた。

幼さが残るというかまだ幼い顔付きで、まあ5、6才ってところか。
さっきは髪がかかっていたから気づかなかったが、額に紋章だろう
か…何かマークがあった。よく見ると手袋らしきものにも、そして
肩にも。

「……だれ？」

子供の声でハッと我にかえた。

子供が綺麗な目で、不信そうに睨んでる。

「俺は、ムラクモ村雲 リョウ亮。お前は？」

可能な限り優しい口調で名のり。名を聞いた。

「…ギル。僕はギルっていうの」

怪しい奴じゃないと判断したんだろ。
不信そうな目は無邪気な目になった。

「ギル？」

「うん、ギル。」

「ギルか…。ギルは何処から来たんだ？」

「……………」

「……………」

二人の間に沈黙が流れた…。

「…んない。」

「……………」

「わかんない。」

「わからない？」

「気づいたらここにいて、眠くなったから寝てた。」

…眠くなったから寝てたって子供かこいつは？

…否、子供か。

…っと思ったらグウーっとな小さな音が聞こえてきた。

「…お腹がすいてるのか？」

「うん…」

「…何か食うか？」

「うん！！」

飯をすすめただけでギルは、本当に嬉しそうに無邪気な笑顔を浮かべた。

それはもう俺が何年も前に忘れたものだった……。

〜
〜
〜
〜
〜

第六話

早い夕食

なんとなくだが…部屋に生活感が戻ってきたような気がする…。

箸は、使えないだろうな…

何を食うだろうか…

それ以前に食材はあっただろうか…？

なんて考えながらちやくちやくと準備を進めていき…。

結局、冷凍ごはんを温めて、ちよつとだけあった油揚げとネギで味噌汁を作り、あとは玉子焼きを作った。

「わあ〜♪」

思いの外おとなしく待っていたギルは料理を見ただけで歓喜の声を上げた。

あの無邪気な笑顔を浮かべて。

「箸は使えるか？」

「はし〜？」

どうやら箸の使い方以前に箸を知らないみたいだ…。

「これだよ。これをこう持って…。」

食事を始める前にとりあえずギルに箸の使い方を教えてやった。

「…こう？」

「そうそう…。うまいうまい。」

ちよつと教えただけでギルはとりあえず箸を使えるようになり。

無意識に頭を撫でてやっていた。

「えへへ…。」

照れ臭そうに笑いギルは箸を動かしたのを見て。

なんで頭を撫でてやったんだろ…。

なんて思った…。

本当に無意識だった…。

何故やったのだろうか…。

「早く食べよう。」

ギルの声で我にかえった。

どうやら最近考え込む癖があるみたいだ。

「ああ…じゃあ食べようか。」

なんで頭を撫でてやったんだろ…

またその考えが頭に浮かんできた。

それと同時に何かよくわからない気持ちを抱いた。

「あ、これおいしい♪」

食をすすめていくなか、ギルが玉子焼きを一つ食べた時に声をあげた。

「そんなに美味しいか？」

「うん！」

そうとう気に入ったのだろう。

それからギルは残りの玉子焼きを全部食べた。

誰かと食事をしたのも久しぶりだった…。

何か心の奥で暖かい何かが湧き出ていた…

くつづく

第七話

「ごちそうさま」

いつもと違う晩御飯をしめくくる言葉をいう。

「ごちそうさま？」

それをギルが疑問系で復唱した。

どうやら言葉の意味がわからないみたいだ。

「ご飯が食べ終わったら言う言葉だよ。あと食べる前はいただきますって言うんだろ。」

「へえ。じゃあ、ごちそうさま！」

どうやら理解力はあるみたいだ。

ただ、いろんな事を知らないだけか。

それからちよつと暇があったので、ついでだからギルにいろんな事を教えてやった。

ギルはさぞかし興味があるのだろう。

俺が一つ一つ教えてやるのを嬉しそうにそして楽しそうに聞いている。

「ん。」

しかし、その時間は長くは続かなかった。

眠くなってきたのだろう。目をこすり、頭がフラフラと揺れ始めた。多分、疲れてるんだろう…。

ギルが本当に実験体なら逃げてる時に精神がズタズタになっているはずだから…。

「眠いか？」

「うゝ…。」

本当に子供だな…。

「ほら、寝るなら布団で寝る。風邪ひくぞ。」

「んゝ」

ギルはフラフラっと布団の方に向かっていき、到達するなりバタツと倒れた。

「布団をかぶらなきゃ意味ないだろ…。」

もう穏やかな寝息をたてているギルに苦笑しつつも掛け布団をかけてやった。

…：…なんでこんなにギルにかまうのだろうか？

まだ会って一日もたっていないし…

ましてや勝手に家で寝てただけなのこうやって夜になっても世話をしている。

自分でも変なやつだなんて思う。

…：…でも、悪い気はしない。

むしろ、楽しいって思っている自分がいた…。

~~~~~

## 第八話

朝……

「…………ん。」

いつも通り目が覚めたが…なんとなく体が痛く、景色が妙に見慣れない。

「スースー」

フツと聞きなれない…しかし聞いた事のある寝息が聞こえてきた。

……ああ、そうだ、今は一人じゃないんだ…

今、俺が本来寝ているはずのふとんではまだ幼い子供が寝ている。成り行きで俺の家にいる。昨日出会ったばかりだが…

「さて、飯を作るか…。」

いつもの朝食より、少しこったものを二人分作り、テーブルに並べた。

「おい、起きろ。」

気持ちよさそうに寝ているギルを揺さぶる。

「ん」

しかし…唸るだけで起きる気配がない…。

「まったく…ほら、起きろ!!」

ため息をつき、次は布団をとった。

「ん…」

次は寒いのか唸りながら体を丸めた。

「ギル！起きろ！！」

さすがにこれ以上ゆっくりすると朝食が冷める…。

「う…。」

やっとギルは微かに目を開け、辺りを見渡しだした。

「！！…うああ！！」

「！！」

そして、俺を見るなり襲いかかってきた。

「ああ！！」

昨日みた時には無かったはずなのに、ギルの手には鋭い爪があり、それが頬をかする。

「ギル！！落ち着け！！！！」

俺が叫んでもギルはお構い無しに襲いかかってくる。

「う…あ。」

しかし、急にギルは電源の切れた機械のように動きを止めて倒れた。

そして俺の家はただ血の匂いと静寂が流れ出した…。

くつづく

## 第九話

俺とあいつ

ギルの突然の暴走：何が何だかわからないまま、ただ時が流れた。

ガサッ

「!？」

不意に手を動かした時に朝刊に手があたりそれで我にかえた。

「……。」

何を思ったかその新聞の記事を読んだ。

「……!？」

その中であまり見なくなかったかもしれない記事を見つけた。

『昨日未明、龍宮研究所より脱走した実験体の一匹が発見、捕獲された。実験体による被害はなく、昨日中に龍宮研究所に送られた。しかし、脱走した実験体のもう一匹は今だ発見されていない。』  
事態は深刻なのだろうか……。

ギルは実験体。それは、容姿などから十分推測できる。

そして、ギルを探している者がいる。当たり前だろう……自分のペットが逃げたら探しに行くと同じだ。

しかし、ギルはペットというわけじゃない……。だが、人でもない。

ここまで、考えて、二つの気持ちが沸き上がってきた。

一つは、ギルを研究所にかえす。理由は、簡単だ。本来、ギルは



狂暴な生物なんだろう。俺じゃ手におえないぐらいの……。被害が、俺だけならまだいいが……。町で暴れたら……。

もう一つは、現状維持だ。ギルは狂暴かもしれない。だけど、研究所にかえしても結局は、なんらかの実験が行われ、さらに狂暴になるかもしれない。

どちらにしろ……。危険はある。それなら……。

「……」

さっきまで、暴れていたのが嘘のように生まれたての赤子のようにスヤスヤと眠るギルを撫でる。

それなら……。ギルを守る。実験が嫌で逃げ出したに違いないから……。なら、そこにかえすのは酷だ。ならば、バレルまでは、普通の人の生活をさせてやろう。それが、小さくてもギルのいい思い出になれば……。

くつづく

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2460b/>

---

俺とあいつ

2010年11月16日18時13分発行